

---

# 君を想う

朧蒼月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君を想う

### 【Nコード】

N8464C

### 【作者名】

朧蒼月

### 【あらすじ】

「ミン、ミン……」病室のベッドの上から見える景色は毎日同じ。俺、桜咲流依（さくらさき りゅうい）は、籠の中の鳥も同然だ。今春、15歳を迎えた俺は普通だったら受験生。勉強に精を出しているはずだった。

「ミーン、ミーン……」

病室のベッドの上から見える景色は毎日同じ。

俺、桜咲さくらさき流依るいは、籠の中の鳥も同然だ。

今春、15歳を迎えた俺は普通だったら受験生。  
勉強に精を出しているはずだった。

しかし、日を送るごとに『貧血』『動悸』『息切れ』  
などが頻発するようになった。

心配した母が病院に連れて行ってくれ、検査を受けた。  
そして

『特発性再生不良性貧血にかかっている』

という事実を聞かされた。

人間は誰でも『造血幹細胞』を骨髓中に持っている。

これは、赤血球や好中球、血小板の基になるものだ。

赤血球は約120日、好中球は約半日、血小板は約10日で壊れる。  
本来ならこれを補うため、毎日大量にこの3種類の血球を作る。

しかし俺は、自らのリンパ球が『造血幹細胞』を壊し、これらを補えない。

だから、赤血球の不足により酸素欠乏が起こり、さまざまな症状が現れるのだ。

そして、この病気は『難病指定』されている。

重症なら、1年の生存率は30%

現在は骨髓移植で5年の生存率は80%。

注射薬投与により60%の人間が回復する。

だが、俺には骨髓の型が合う人間もいなければ、薬も効かなかった。  
今は、赤血球を人工的に補ったりして症状を和らげている。

そして…すぐそこにある『死』に向かって歩むばかりだ。

「コンコン」

「柚希<sup>ゆずき</sup>か？」

「うん。」

「いいよ。」

「お邪魔します。」

そういつてドアを開け、入ってきたのは『藤野<sup>ふじの</sup> 柚希<sup>ゆずき</sup>』だった。  
肩まで伸ばした髪を揺らしながらこちらに歩み寄ってくる。

「おはようー！」

「もう昼だけど？」

「あたしは今起きたから、おはようでいいの！」

隣の部屋に入院している彼女は、病人とは思えないほど、明るい。  
柚希は自分の病気について、何も話してくれないが。

「そか。じゃあおはよう。」

「ねえ。外、行かない？」

「うん。行くよ。」

彼女の手を借りながら、ベッドを降り中庭へと向かう。

太陽の光が眩しい。

俺達が向かうのは、片隅にある大きな木下のベンチ。

そして俺達はここで出会った。

3ヶ月前、このベンチに座っていた俺に

「君、なんていうの？」

と、微笑みながら話しかけてきたのが柚希だった。

その微笑みは、さながら太陽のようで。

俺は一瞬の内に彼女に好意を持ったのだった。

そしてそれが段々と恋愛感情へと移り変わっていつているのも自覚している。

俺に残された時間は多くは無い。

どうせ死ぬなら、好きな人の腕の中で死にたい。

だから、俺は決意してきたのだ、この想いを伝えようと。

隣に座っている柚希は歌を口ずさみながら足をブラブラさせている。  
その顔はどことなく楽しそうに微笑んでいて、心を暖かくしてくれた。

「なあ。」

「ん？なに？」

「俺等ってさ、ここで出会ったんだよね？」

「うん。年も同じだったし、それからは毎日一緒にいる気がする。」

「これからもさ、ずっとこうやって俺の隣に居てくれないか？」

心臓の鼓動が早くなる。

「いいよ。」

「え？俺と付き合ってくれて言ってるんだぞ？」

「あ、そうだったんだ。うーん……」

「やっぱり、ダメ……」

「いいよ。あたしも、流依の事好きだし。」

「え！今なんて？」

「だから、いいよって。」

「……あ、ありがとう。それから、よろしく。」

「えへへ、こちらこそ。あ、プレゼントあるんだ。目つぶって。」

言われるがまま、目をつぶる。

「っ!？」

「嫌、だった？」

「あ、いや、ビックリして……。」

「なら、もう一回。」

「もう一回って……。キスって人前でするもんじゃないぞ？」

「誰も見てないからいいの。」

「はいはい、それじゃあ目つぶって。」

「え？ 流依がしてくれるの？」

「女に襲われるなんて、男の恥だ。ほら、早く」

柚希が目をつぶった。

心臓が強く脈打つ。

それは、異常なほどの速さで。

「うつ！ あ、ああ……」

「？ 流依？ 流依！」

柚希に抱きかかえられた状態で、意識が遠のく。

そうか、俺このまま死ぬんだ……。  
まあいいか。

望みどおり、大好きな人の腕の中で死ねるんだ。  
でも、その大好きな人が何ていう病気にかかっているか知りたかったな。

柚希。ごめんな？

もうちよつと一緒に居たかったんだけど。

出来そうにないや。

ここはどこだろう？

辺りにはただ漆黒が広がっている。  
上も下も、右も左も、何も無い。  
闇だけが広がっている。

不意に目の前に、小さな光が灯り始めた。  
だんだんと大きくなる光はやがて、人の形を成す。

柚希……。

一瞬でもいいから会いたかったその人が、目の前に現れたのだった。

たった一言、謝る事が出来たらしいのに、

たった一言、伝えられたらしいのに、

喋る事が出来なかった。



喉まで出ている、この想いは音にならない。

ただ、目の前で微笑んでいる君に

「今までありがとう。大好きだよ。」

と、言うことが出来たらいいのに。

手を伸ばしても、触れることの出来ない光は

次第に暗くなり、やがて消えてしまったのだった。

目をつぶると、そこには俺がいた。

暗い部屋で、柚希に抱かれ、静かに眠っている俺を見た。

そうか、やっぱり死んだんだ、俺。

柚希をこんなに泣かせちゃって……。

彼氏、失格かな。

柚希に近寄る。

涙で濡れた瞳を見つめる。

「空から、見守ってるよ。いつまでも、いつまでも……。」

出来ることなら、また話したかったんだけど。

出来ることなら、また一緒に笑って居たかったんだけど。

そして、願いは決意へと変わる。

想いがあれば、また会える。

愛しい彼女に、

謝って、

好きだって言って、

抱きしめて、

ありがとうって言って、

そして、さようならって言うんだ。

そうじゃなきゃ、俺は完全に死に切れない。

待っててくれ、柚希。

何年後になるか分かんないけど、絶対に抱きしめに行くから。

きっと俺は、柚希と逢ってみせる。

柚希の事、世界中の誰より、好きだから……。

（後書き）

閲覧有難うございます。

第2作目の短編小説、いかがだったでしょうか？

「君を想う」

は続編も考えていますので、

またお時間があれば、そちらも宜しくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8464c/>

---

君を想う

2011年1月15日21時21分発行